



福島県各地に、  
全国から様々な形の応援が寄せられています！  
そんな頼れる皆さんからのメッセージをお伝えします。

## 福島へのラブレター



NPO法人  
多言語センターFACIL  
吉富 志津代さん

この度の災害で被災されました皆様には、心よりお見舞い申し上げます。私は、大震災のあとに初めて福島県を訪れる機会をいただき、その自然の美しさに見とれました。しかし、及ぼした被害は、自然のもたらしたものであるというより人災とも捉えられ、憤りを通り越したものであろうと思います。この憤りを、被災地に住んでいる日本語の理解が不十分な住民とも共有をし、また、世界にむけた発信となるよう、多言語によるホームページ作成のお手伝いを、今後もしていくつもりです。



アクアクララ株式会社  
営業企画部  
後藤 公一さん

東日本大震災にて被害に遭われた皆様には、心よりお見舞い申し上げます。私たちアクアクララは全国でお水の宅配サービスを展開する企業です。今回の震災で私たち出来る最良の支援方法は無いかと考え、赤い羽根の中央共同募金会様のコーディネートにより、主に沿岸部のボランティアセンターに活動されているボランティアさん達の熱中症対策として、当社商品であるウォーターサーバーと12リットルのボトルを提供させて頂いております。アクアクララでは、東北地方・福島県の復興を信じ、私たちが出来る支援活動を継続的に実施させていただきます。

## リレーエッセイ

### 心のおしゃれ

福島県精神保健福祉センター 所長 畑 哲信

毎日の生活に充実感がない、生活の目標が持てない、気持ちばかり焦って何も手につかない...震災直後のあわただしさは落ち着いたものの、それと引き換えに、うんざりした気持ちや、努力しても仕方がないといった気持ちが首をもたげてきます。少しでも前向きな気持ちになりたいと思うのですが、どうしたらいいのでしょうか？

震災後の応援に出かけたある日、打ち合わせのテーブルに花が一輪活けてありました。非常事態ですから、緊張もあり不安もあり、気持ちが落ち着かない状況です。でもその一輪で、気ぜわしかった雰囲気、少しゆるんだようでした。実はこの花はスタッフの一人が持ち込んだものでした。花を置いた当人は「なんとなく花でもあったらいいかなと思って」と言います。なんともおしゃれなものです。いろいろ荷物も多い中、そんな余裕があるなら、食糧とか、もっと大事なものを持ってきたら？ と思ってしまったかも知れません。ちょっとしたおしゃれで得られたのは、ちょっとした気持ちの安らぎですが、とても大切なものだったように思います。

おしゃれをすることは、認知症でも効果があります。認知症が進むと、物事に対する関心が狭まって、だんだんと身なりにもかまわなくなり、食べることばかり考えるようになっていきます。そんな人にお化粧をしてあげると、不思議なことに、とたんに生き生きとして、しゃんとしてしまうことがあります。生きるために食べることは大切ですが、お化粧をしても体の役には立ちません。しかし、心が生きるためには、食べることよりも、むしろお化粧の方が大切だったようです。そして、認知症の進んだ方でも、そうしたおしゃれを求める気持ちがしっかりと残っているものなのです。

「なんとなく花でもあったらいいかなと思って」... 私たちの心の奥に潜んでいる、ちょっとしたおしゃれな気持ちが、案外と前向きな気持ちを引き戻してくれるものです。そういえば、おしゃれの「お」を取ると「しゃれ」になります。ユーモアというのは、心のおしゃれ——逆境を乗り越えるための強い武器なのです。自分の境遇を笑ってやりすごす。あるいは、ちょっとあり得ないかもしれないような夢を話してみる。そんな、しゃれっ気が欲しいですね。そうそう、おじさんのだけじゃれも不器用なおじさんのおしゃれです。大目に見てあげましょう。

## ボランティアの皆さんへ

7月29日に発生した豪雨災害。金山町災害ボランティアセンターを通じボランティアを受け入れた西谷地区、遠藤晴男区長さんに感想などを伺いました。

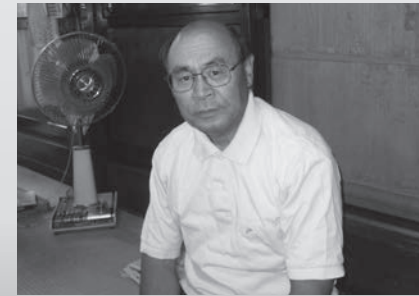
西谷地区では7月31日朝に避難勧告が解除され、その日のうちに近所同士で助け合い片付けをはじめていました。

「床上浸水が24戸ありましたが、量を洗い、拭いた位で片付けを済ませていたんです。そんな折、ボランティアセンターから床板を剥がして泥を出し、消毒しないと、匂いや虫の発生、感染症の原因になると教わりました。覚悟を決め、被害のあったお宅一軒一軒を説得して廻りました。大がかりな作業ですが、みんな一斉に決断したので、被害の割に早く片付けられたと思います。」

地元から、遠くから、本当にたくさんの方がやってきました。地元高校の生徒、OB、先生たち。西谷で毎日活動場所の案内役を務めてくれたのは、東京から来た19歳の若者でした。震災被害が大きかった浜通りから、と

いう人も多く、中には避難先から来てくれた方もいたそうです。

「おたがいさまの心がうれしかったですね。私たち住民も作業していると、私たちがいるうちに休んでくださいね、と言ってくれる配慮がありがたかった。桐転じて福となす、水害は大変でしたが、これを縁に出会えた方がいたこと、地域の絆や支えあいを確認できたことはとてもよかったと思っています。」



「おたがいさまの心がうれしかったです」とボランティアを受け入れた経験を話す遠藤晴男区長さん

## こんにちは、生活支援相談員です!

一軒一軒ドアをノックし、おひとりおひとりに「お元気ですか?」と声をかけ、「何かお困りのことはないですか?」とお尋ねする。生活支援相談員の仕事は、「その人らしく暮らすことができる地域社会」を目指す社協活動の原型のひとつだと思います。そしてまた、県内の被災者の多くの方々、「住み慣れた地域」から離れざるを得ない厳しい環境の中で、新たな『つながり』を築かれる

お手伝いをするようになります。市町村社協の生活支援相談員さんと一緒に実践を重ね、「福島県の生活支援相談員活動」を創っていただければいいと思っています。



生活支援相談員 福嶋 美奈子

### 編集後記

規模は縮小されたものの、県内各地で夏祭りや花火大会が開催されています。大震災だけでなく、会津豪雨災害もあった福島ですが、たくさんの方に支えられ、復興に向け一歩一歩前進しています。(吉川)



がんばろう、福島。

最新情報はホームページで  
ご覧ください!  
<http://www.pref-f-svc.org>



次号は9月19日発行です